

家政は更に追い討ちをかけるよ

うに、祖谷を藩の直轄領とし、

一揆指導の名主は名子に落し、一揆

で戦った百姓を下人に落した。

当時祖谷には三十六名のお土居

と称する名主がいたが、その大半

は名子に落された。

名子は農奴であり、下人は人間

失格で、牛馬同様売買される。

名子は政所に対し年三人役、

名主には年六十日努力奉仕をせ

ねばならず、下人は無制限に夫役

負担と定められ、生涯主家に飼わ

れるが、老残の身となると野ざらし

の運命も覚悟しなければならぬ。

また、下人と定められた女の中

には他国に売られた者もいる。

この悪政は明治維新まで続いた。

松太郎たちの祖父は国学者とし

て長宗我部に仕えた玉尾松右衛門

で、父の松之介は祖谷一揆の先陣の

指揮をとり、代官の首級をあげた

ため磔刑となった。

更に代官と政所は、

「見せしめのため、玉尾一族は末代

まで下人に落す」

と掟を定めた。

松太郎兄弟は売買されて働く

うち病となり暇を乞い、野ざらし

を覚悟で金毘羅まで辿りついたの

である。

話を聞いて蔵太夫は、

「他国のことながら義憤を感じる、

蜂須賀公に神罰があたりぬのが

不思議である。ともあれここで社人

の見習いでもするがよい」

そういつて名も「松太夫」「権

太夫」と改めさせた。出自が出自だ

けに学問の心得もあり、特に書の

才能に恵まれていたので、昼は

金毘羅大権現のお守受所で「守札」

を書き、夜は邸のある五条八幡宮

で蔵太夫に神道、国学を学んだ。見

よう見真似で奉幣、祝詞奏上、加持

祈祷も憶え、

「さすがに血脈は争えぬ、

立居振舞にも落つきがあり、わしよ

りも本物の社人に見える」

と蔵太夫は苦笑した。生来病弱

であった蔵太夫はそれから間もな

い寛永十九年（一六四二）

の五月のある日、孤独な生涯を終

えた。

死期を予知した蔵太夫は、松太夫

兄弟を枕元に呼び、

「わしの死後も金毘羅大権現に仕

えると共に五条八幡宮もよろしく

頼むぞ、松太夫は性温厚ゆえ心配は

ないが、権太夫の多感な性質が気が

かりでならぬ、無事に一生を終

えたければ忍の一字を忘れぬよ

うにせよ」

素晴らしい残して世を去った。

蔵太夫の死後、金毘羅大権現を

総括する金光院の別当有典は兄弟

に、

「決して下知にそむきまじく候」

と誓書を書かせて、金毘羅

同時に兄弟は蔵大夫の遺志をつ

ぎ五条八幡宮にも奉仕することに

なった。時に松大夫五十四才、権

大夫五十二才であった。

松大夫はその年、祖谷から妻をめ

とつた。長年の艱

苦にやせた顔がほころんだのは妻

をむかえてからである。妻の名は雪

といい、祖谷の名家阿佐家の娘で

二十才を過ぎたばかり、体も心も

やわらかく、おっとりとして申分

のない女であった。

まもなく男の子が生れ内記と名

づけた。内記は色白く、眉目優れた

うえに利発で、三才の時、修験者の

読む般若心経や観音経を空んじ

五才になると守札を書き、その字が

巧みで人々は争って買い、

「内記様は桓武天皇様のお血筋を

ひく平家の末裔というぞ」

「玉尾という姓は帝の末ゆえつけ

たそうな、この守札は格別ありがた

いぞ」

と噂しあつた。松大夫はその噂

を耳にすると、ふと内記の将来に

不安を感じた。

「内記に守札を書かせるな、余り

噂になると本人の将来のためよ

くない」

そう雪に注意すると、雪は

弥勒菩薩のような顔に笑を浮かべ

て、

「苦勞性なお人」

とおおらかに笑つた。  
雪の生家阿佐家は祖谷では「お

館」と呼ばれ平教盛の二男国盛

の末裔で、系図や赤旗も伝わってい

る。

雪はこの館の姫として育つたの

で、人の噂を気にしないおおらか

さがある。  
松大夫は祖父や父が平凡な人間

であつたら悲運は訪れなかつたと

思い、

「人間は世の片隅でそつと生きる

のがよい、内記をここへ置くと人々

が甘やかして困る。祖谷へでもあず

けよう」

そういうと、雪が姉智である大西

丹後にあずけたいという。大西丹後

は京都吉田神社の社人で当時京都

で、  
「和漢才学比類なし」

とうたわれた国学者であつたか

ら、松大夫も同意した。

松大夫と同じ頃、祖谷からむかえ

た権大夫の妻は、産後の肥だちが悪

く、親子もろとも世を去つた。

それから権大夫は酒びたりの

日々を送るようになり、社への出仕

も怠りがちになつた。松大夫が、

「お前の気持が分らぬではないが、

心が荒れては神職は勤まらぬ

ぞ、酒はほどほどにせい」

といさめると、

「敬神の心もないのに形だけ神

に仕える奴の気が知れぬ」

とうそぶくのだった。

そこで松大夫は祖谷から末弟の

三太郎を呼ぶことにした。三太郎も

下人に落されているので金光院の

名で買い取つた。名も三右衛門と

あらた しやじんみならい  
改め社人見習にさせると、それを  
待ちかねたように権大夫は修業と  
称して一年の半ばを旅で暮すよう  
になった。

さんうえもん こんだゆうふざい  
三右衛門は権大夫不在の間は  
神社を守り、松大夫にもこまめによ  
く仕えた。

まつだゆう  
松大夫がある日、象頭山中腹に  
ある本殿境内から眼下を眺めてい  
ると、

まつだゆうさま やま かぜ つめ  
「松大夫様、お山の風は冷とうござ  
います。もうお入りなされませ」

こえ  
という声がした。振り向くと  
三右衛門であった。

さんじょう ひぐ はや  
山上は日暮れが早く、西空の雲  
が淡紫色に染まり、麓から烟煙  
が沸き起って山頂を揺曳する、松  
大夫は西空を眺めながらつぶやく

ようにいった。  
さんうえもん いや いりひ うづく  
「三右衛門、祖谷の入り日は美しか  
ったのう」

いっしゅん  
「はい、一瞬のうちに日が沈むせ  
いか、あの異様なまでの赤い落日、  
今でもこの眸に焼きついておりま  
する」

らくじつ  
「あの落日を、もう一度眺めたいの  
う」

まつだゆうさま いや  
「松大夫様も祖谷をなつかしいと  
お思いですか」

いや で ろくじゅうねん  
「うむ、祖谷を出て六十余年になる  
が、わしの心の中にはいつも祖谷  
の風が吹いている」

にしぞら なが  
「わたくしは、こうして西空を眺め  
るたびに荒れ果てたであろう祖谷  
の邸を思い出しまする」

いや やしき やま しやめん りよう  
祖谷の邸は、山の斜面を利用し  
て建てた頑丈な木組みの家であつ

5

いすみ  
た。泉はないので毎朝空も水の面  
もまだ乳色に煙っている頃、切り立  
つような深い溪谷に降りて、溪流  
の水で全身を洗う「みそぎ」を日課  
として育った兄弟は、そそり立つ  
樹木や聳える岩の間をとびはねて  
毎日遊び暮した。

しこくさんみやく おねづた じゅちく  
四国山脈の尾根伝いに樹木の  
間をくぐりぬけて祖谷山の山頂  
に立つと、山また山の深い谷間を埋  
める白い雲の彼方に、紺青の空が  
拡がり、その空の彼方遠くに燧灘  
が見える。

おさな ひ さんきょうだい  
幼い日の三兄弟は、やがて訪  
れる悲運も知らず、毎日この景色を  
眺めて語りあつた。

(以上10月8日放送分)